

## 推進戦略WG（第3回）における主な議論

- FP7などを参考に、年次ごとの予算に柔軟性を持たせるような仕組みが考えられないか。
- 複数年度の予算が必要かどうかよく議論しなければならない。今の予算制度では、初年度に決めた予算を次年度以降ダイナミックに変更できないという問題がある。
- テーマを細分化するのではなく、大きい枠で一つのプロジェクトと考えることができれば、繰越のような概念は不要なのではないか。細かいテーマは毎年予算が減る方向しかない。初年度は少ない予算のテーマがあっても、他に予算の大きいテーマがあり、それらがうまく組み合わせればよいのではないか。
- 採択評価の視点として、NSFであれば「社会に対する広範な影響を示すより幅広いインパクト」、FP7であれば「結果の普及および使用によるインパクト」というワードがある。これらを参考に、本委員会のテーマの1つである社会的ニーズにどう対応していくかという観点を、今後重視していく必要がある。
- （推-3-4別紙）今後国際競争に勝つためには、左下の萌芽的・革新的技術から右上の事業化・成果展開までを見渡した「社会課題達成型プロジェクト」のようなものも必要ではないか
- マネジメントを行う会社にしっかりお金をつければある程度の問題は解決できるのではないか。今のプログラムの問題は、誰が動かしているのかははっきりしないので、フィードバックがないこと。マネジメントをきちんと行い、社会実装に繋げることは非常に重要な課題である。
- 「産学官」だけではなく、国民も含めて「産官学民」という言葉を使うべきではないか。インターネットなどを使って、国民を巻き込んでいくようなプログラムを作れば、国民側の関心も高まるし、国民のコンセンサスを広げることにも繋がるのではないか。
- 環境問題のような地球レベルの課題と、健康医療のような国民レベルの課題に分けるなど、課題抽出の時にもう少し具体的なイメージのコンセプトが出るようなくくりが望ましいのではないか。
- 研究の結果として社会や制度をどう変えるかということを知っている前提で研究をやらないと、最後の死の谷は渡れない。社会実装する時に、どういう前提で研究をやっているか、入口と出口を繋ぐ形で公開するのは良いことだと思う。
- 地球的課題や社会的課題として民間企業が取り組んでいるのは、どちらかというところと研究開発課題ではなくソリューションである。その時点における最新のテクノロジーを組み合わせるソリューションとして解決していくもの。社会実装というソリューションというイメージがあり、言葉を分けなければいけない。
- 国が税金を使って研究開発に対して投資をしているという観点は必要である。またそこには国としての戦略とリターン/インベストメントという視点が必要である。
- 課題設定のところで「社会実装まで官がサポートするもの」と「社会実装は民間がやるもの」との区別が必要である。この2つは一概に決められないが、客観的な目から官がどこまで投資するのか、研究会など企画の段階で明らかにすべきである。
- 政府の役割は政策を作るところから始まるが、最後に市場創成に対してドライブがかかる所に帰結しないと、完結した形にならないのではないか。政策は市場として帰ってくるという自信を開発サイドに与えることが重要。